

《 宗教法人 聖書宣教会 》

聖書神学舎

講 義 概 要

2 0 1 9 年 度

第 1 版 (2018.10.2)

- 科目によって変更の可能性があります。
- 各科目の単位数、該当学年、開講年度等については、別紙カリキュラム表で確認していただけます。
- 1単位は、基本的に50分×15回の授業で構成されます。
- ※の付いている科目は隔年で開講します。

【旧約学】

ヘブル語

旧約聖書の原語であるヘブル語の初級文法を1年かけて（後期から翌年度前期まで）学びます。多くの人にとってなじみの薄い言語なので、アルファベットや音節といった基礎的なことから始めて、語彙を増やしつつ、聖書テキストを読む力を養います。テキスト：Thomas O. Lambdin, *Introduction to Biblical Hebrew*.

アラム語

アラム語はヘブル語とよく似た北西セム語です。ヘブル語の知識を前提として数回でアラム語とその文法の全体を概観します。その上でダニエル書を講読しつつ、アラム語の文法を詳しく学んでいきます。最後はエレファンティネ島から発見されたパピルスのアラム語文書に挑戦します。教科書として F. Rosenthal, *A Grammar of Biblical Aramaic* を用います。

旧約通論

日本語で旧約聖書（新改訳）をしっかりと読み、前後期一年間で二度通読します。前期はイスラエルの歴史に注意を払いつつ通読し、後期は通史を念頭に置きつつ各書に焦点を当てて通読し、旧約の全体像を把握します。以下の文献を参考にします。Arnold, B. T. & B. E. Beyer, *Encountering the Old Testament: A Christian Survey* (2nd ed.), Grand Rapids: Baker Academic, 2008.; Kaiser, Jr., W. C. *A History of Israel From the Bronze Age Through the Jewish Wars*, Nashville: Broadman & Holman Publishers, 1998.; Kaminski, C. M. *CASKET EMPTY: Old Testament Study Guide*, Charleston: Casket Empty Media, 2013.

旧約緒論

旧約聖書緒論の総論として「正典論(正典の決定、外典の問題など)」「ヘブル語本文(様々な時代の写本からマソラテキストへ、翻訳聖書など)」を学びます。また各論として、聖書批評学で特に問題とされることの多い「イザヤ書」と「ダニエル書」を取り上げます。

旧約研究 I (五書)

聖書の世界としての古代オリエントに旧約聖書を位置づけ、聖書を学ぶための方法論を、創世記を取り上げて学びます。所謂「文書資料説」の土台となっている聖書批評学の諸問題についても考えます。

旧約研究 II (歴史書・預言書)

古代カナンの文化・宗教との対比の中で、イスラエルの預言・預言者・預言書について学びます。アモス書を具体的に取り上げます。

旧約研究 III (聖文書)

ヘブル詩の並行法の原則を学びつつ、いくつかの詩篇の釈義を行い、知恵文学の諸問題について考えます。

旧約研究 IV

サムエル記研究の諸問題について

旧約原典講読

ヘブル語初級文法を終えたのちに、旧約テキストを原典で読む力を養うために、250節を目標に創世記の講読をひたすら進めていきます。並行して、単語力を養っていきます。

テキスト：G. M. Landes, *A Student Vocabulary of Biblical Hebrew*

旧約釈義 I

列王記17章を講読しながら旧約聖書の釈義の方法を具体的に学んで行くクラスです。ヘブル語本文からみことばをどのように釈義し、説教へとつなげてゆくか、その理論から実践までを学びます。教科書的にLambdinの文法書の他に、W. R. Scott, *A Simplified Guide to BHS.* とR. J. Williams, *Williams' Hebrew Syntax*を用います。

旧約釈義 II

ヨナ書を読みながら、散文テキストの釈義の方法を学びます。統語論や語義研究を踏まえながら、さらに一歩進んだ釈義として談話文法や語りの文学といった問題についても序論的な学びをしていきます。

旧約釈義 III

おもにヘブル語の詩文の釈義を学びます。幾つかの詩篇を選び（82 篇、22 篇等）、その詩篇を講読しながら、ヘブル詩の特徴、並行法の技法等々を学びます。

旧約釈義 IV

引き続きイザヤ書のメシア預言の箇所（2 章、42 章、53 章）を講読しながら、詩文の釈義を選んで行います。

旧約神学

旧約神学の序論（歴史や方法論）を学んだ後、「契約」を軸にして旧約聖書における契約の展開、更新、成就を考えて行きます。最後に旧約聖書と新約聖書との関係を考えます。

旧約各書 I（レビ記）

テキストの構造、聖書批評学、旧約神学といったことに入門的に触れつつ、レビ記そのものを丁寧に読んでいきます。学びを通して、私たちの信仰の確信であるキリストの贖罪のわざ、礼拝、伝道者としての献身ということについても考える機会としたいと思います。

参考テキスト：S. H. ケログ「レビ記」

旧約各書 II（民数記）

民数記は、今を生きる私たちとは無関係なものに思われがちです。けれど、ここには現代の教会にとって実践的な、また大切なことが数多く記されています。この書の学びを通して、教会に仕え、みことばを語る者としての備えをいたします。

旧約演習

聖書学の諸問題を、学術論文を読みながら考えていきます。

特講 I（古代エジプトと旧約聖書）

アブラハムが飢饉のためにエジプトに下ったときよりはるか以前から、イスラエル民族は古代エジプトと非常に密接な関係を持って歩んできましたが、その関係はそれほど注目されてきたとは言えません。その両者の歴史的、文化的、言語的関係を歴史を追って考えていきます。

【新約学】

ギリシャ語（初級）

講義では、受講者が新約聖書を原語であるギリシャ語で読み解く上で必要な語彙と文法の基本を学び、次のギリシャ語中級、講読、さらに釈義へと繋げることを目標としています。内容は、アルファベットの習得から始まって、語彙を増やしつつ、文法の知識と理解を深め、簡単な文章からより複雑な文章にも対応出来るように進めていきます。テキストは、W. H. Davis, "Beginner's Grammar of the Greek New Testament" (Haper & Row, 1923) の内田和彦師監訳のテキストを用います。

ギリシャ語 (中級)

初級に続き、受講者が新約聖書の原典を読むために必要な、ギリシャ語の更なる習得を目指します。具体的には、中級以上の文法、特に統語論(syntax)を中心とした学びです。主要テキストは、Daniel B. Wallace, "Greek Grammar Beyond the Basics" (Grand Rapids : Zondervan Publishing House, 1996) です。

新約通論

新約聖書を立体的に理解するために、背景となる歴史や文化を踏まえ、時間的、空間的な拡がりを理解しながら、新約聖書を読み進めます。また各書の特徴や役割を理解して、新約聖書理解の深化を目指します。クイズと課題提出が多数です。

新約緒論

新約通論(新約全書の概観)に続き、新約各書の著者、執筆年代と場所、背景などを取扱う科目です。聖書が神のことばであることを踏まえつつ、新約聖書の正典論、本文批評(ギリシア語原典の本文確定)、高等批評(各書の文芸批評)について学びます。本文批評、高等批評については、具体的な箇所とテーマを分担して発表を行います。

新約研究 I (福音書)

クラスの前半において、福音書研究の歴史に触れます。共観福音書問題における歴史批評学と文学批評学の概観を学びます。クラスの後半においては、文学批評学の視点をも考慮した上で共観福音書における並行箇所の違いにも触れ、神学的理解を深めます。また、研究レポートの課題を通して、自ら共観福音書における並行箇所の違いについて考察します。

新約研究 II (使徒の働き)

「使徒の働き」を順番に講解します。文学的・神学的特徴に留意しつつ、本書全体に流れているテーマを探ります。その中で、本書における解釈学的問題や、教会が抱える今日的な問題についても触れていきます。また、テーマ研究レポートの課題を通して、自ら本書におけるテーマ研究ができるようになることを目指します。

新約原典講読

ギリシャ語基礎文法、中級文法を学んだ者がそれらを用いて実際に新約聖書を原語であるギリシャ語で講読します。原文で読むことに慣れるとともに、日本語では読み解けない細かなニュアンスをより正確にくみ取る学びです。毎回予習を前提とし、文法や語彙の理解を深めながら読んでいきます。

新約釈義 I

新約聖書を釈義するための方法論、原則を学びます。釈義説教のための準備、さらには釈義論文を書くための準備ができることを目指します。原則を学んだ後、「マルコの福音書」をテキストとして、受講者は担当箇所の釈義発表をします。また、釈義研究レポートの課題を通して、自ら新約聖書を釈義できるようになることを目指します。

新約釈義 II

新約釈義 I に続き、パウロ書簡等を対象に、釈義の更なる習得を目指します。原典からの釈義で終らせず、いかに説教へとつなげてゆくかを視野に学びます。

新約釈義 III 「新約釈義 IV」と合同開講

「ローマ人への手紙」を釈義します。緒論的問題や解釈学的な問題を確認した後、新約釈義 I・II に沿った方法で、受講者は各自担当箇所の新約釈義発表をします。また、釈義研究レポートの課題を通して、釈義論文を書くための準備をします。

新約釈義 IV 「新約釈義 III」と合同開講

「ペテロの手紙第一」を釈義します。本書全体の書を釈義することを目指します。緒論的問題を確認した後、新約釈義 I・II・III に沿った方法で、受講者は各自担当箇所の新約釈義発表をします。また、釈義研究レポートの課題を通して、釈義論文を書くための準備をします。

新約神学

I. Howard Marshall, *New Testament Theology* (Downers Grove: InterVarsity, 2004) における方法論を参考にしながら、新約聖書における神学を全体的に学んでいきます。受講者は担当箇所の発表を担当することによって、英書を理解し、まとめ、発表する訓練を身につけます。また、新約神学における各論的テーマについては、レポート課題を通して自ら神学的考察ができるようになることを目指します。

新約各書 I

新約聖書の中から一つの書物を取り上げ、執筆背景などの緒論的研究をはじめ、いくつかのテーマ研究や語彙研究などを行います。

新約各書 II

新約聖書の中から一つの書物を取り上げ、執筆背景などの緒論的研究をはじめ、いくつかのテーマ研究や語彙研究などを行います。

新約演習

新約学における今日的な問題の一つである、新約聖書著者による旧約聖書使用について学びます。当該分野における書籍・学術論文を講読し、まとめ、発表する訓練を身につけます。また、個別の旧約引用に関するレポート課題を通して、当該テーマについて自ら考察ができるようになることを目指します。

【組織神学】

組織神学 I (序論)

序論では、まず組織神学の方法論を考えます。その後、神学的前提である聖書そのものを、啓示論、靈感論、聖書論という順番に考えていきます。J. J. デイビス「聖書の教理と神学の学びのための基本聖句集」を副読本として利用します。

組織神学 II (神論)

聖書が語る神について伝統的な神論の各課題を考えます。神をどのように知るのか。神の可知性と不可知性、神の御名、神の属性、三位一体、神の選び、創造、摂理等。ここでも J. J. デ

イビス「聖書の教理と神学の学びのための基本聖句集」を利用します。

組織神学 III (人間論)

人間とは何かについて聖書が教えていることを学びます。人格を持つ被造物としての人間、神のかたち、セルフ・イメージ、罪の起源と拡大、罪の抑制（一般恩寵）、人間の自由といった問題を中心に扱います。主要な参考書は、ミラード・J・エリクソン「キリスト教神学」第三巻、A. A. Hoekema, *Created in God's Image* です。

組織神学 IV (キリスト論)

聖書から、キリストの人格とキリストのみわざを中心に、キリスト理解を深めることが中心です。最初期のキリスト論論争、近現代のキリスト論の形成も簡潔に学びますが、詳細は教理史と現代神学の科目で扱われます。

組織神学 V (救済論)

救済の諸契機を項目別に学んで生きます。扱う範囲は非常に広く、キリストの贖い、召し、新生、信仰と悔い改め、義認、和解、聖化、聖徒の堅忍、救いの確信等です。特に決まった教科書はありませんが、副教材として「基本聖句集」を利用します。

組織神学 VI (教会論)

教会論は、すでに自分がそこに属しているため、もう分かっていると思いがちです。けれど今一度、聖書そのものが教会をどのように表現し、教えようとしているのかを確認します。また教会の歴史の中での危機を通して問われたことから、教会とは何かを学びます。

組織神学 VII (終末論)

聖書が言及している世の終わりに関する重要な主題、具体的には患難時代、「イスラエル」、千年王国、キリストの再臨、最後の審判等、諸説を視野に入れつつも、聖書の証言・主張を重視する聖書神学に立脚して考察します。特に、救いの完成という視点から、教会が依って立ち、世に発信すべき希望を再確認します。主な参考文献は、M.J.エリクソン『キリスト教神学』第4巻、岡山英雄師『小羊の王国』、『黙示録の注解 恵みがすべてに』等です。

聖書解釈 I

私たちは日本語で聖書を読み、考え、学び、説教し、福音を伝えてゆきます。そのために日本語の特徴について学び、自分が語り、また書き記す言葉への敏感さを養います。他に縮約とブックレポートを行います。

聖書解釈 II

著者と読者の関係、テキストの意味、著者の意図、解釈者の姿勢について、ポストモダンの解釈学を意識しつつ、聖書解釈のあるべき姿を問います。

現代神学

現代の代表的神学者を選び出し、その方法論や神学思想を批判的に検討し、福音主義における独自の神学的立場を、学生ひとりひとりが確立していくことを目標としています。教科書として A. E. マクダラスの「キリスト教神学入門」を用います。その他宇田進「現代福音主義」、エリクソン「キリスト教神学」を用います。

弁証論 I ※ (偶数年度開講)

キリスト教信仰に対する疑問をめぐる代表的な議論を取り上げます。その中でキリスト教信仰を弁証する必要性と意義と限界を考えます。取り上げる代表的な議論としては、神の存在論証、悪の問題、信仰と理性の問題です。また、議論の方法としてコミュニケーションに関する問題も取り上げます。

弁証論 II

弁証論の諸分野の中で、「聖書と科学」のテーマに絞って学びます。「科学とは何か」「科学の発展とキリスト教」「創造と進化」などの課題を掘り下げ、「創造に関する講演」の実演を通し、聖書と科学が両立しないと考えがちな現代日本人への宣教の備えをします。

【歴史神学】

教会史

初代教会から現代まで、教会を通してなされてきた主のみわざの展開と、残された歴史的課題について学びます。主の救いのご計画の中であって、私たちの立ち位置と務めとを知る手がかりとします。

教理史

ニケア信条、ニケア・コンスタンチノーブル信条、カルケドン信条、偽アタナシウス信条、使徒信条の成立史をたどりながら、三位一体論とキリスト論の成立を歴史的に考えていきます。宗教改革以後は、ルター派、改革派、会衆派、バプテスト派など各教派の信仰告白や信仰問答を取り上げ各教派の特徴を考えます。

日本キリスト教史

ザビエル渡来以来今日までのキリスト教の歴史をたどりながら、特に福音が日本人の心、生活、社会にどのように、どの程度根付いたのかを学びます。同時に、この国が福音化するための宣教や教会形成の課題についてともに考えます。

【実践神学】

説教理論

説教の本質を理解し、説教の実際について学び、説教する備えをします。

説教演習（テーマ）

説教理論に基づき、本講では、①キリスト教的主題(教理)、②教会暦および諸行事、③冠婚葬祭およびこの世に即した主題(テーマ)を扱います。主題説教の作成と演習、批評を通じ、主題説教の長所と短所を確認、「主題的講解説教」に繋げることが目標です。説教者として整えられるための重要な切磋琢磨の機会と捉えています。

説教演習（伝道）

「伝道説教」について考察した上で、各自が伝道説教を準備、演習し、相互批評により、改善を試みます。

説教演習（旧約釈義）

決められた旧約聖書の箇所を連続講解説教のようにして各自が釈義し、それに基づいて実際に説教を作成し、クラスの中で合評します。聖書の箇所は、詩文の詩篇と散文の列王記から選んでいます。

説教演習（新約釈義）

新約聖書（マルコの福音書）から指定された箇所を釈義し、説教原稿を作成し、説教の後に批評しあうことで研鑽を積みみます。

宣教学 I（序論）

この講義は宣教の聖書的、神学的土台を理解し、教科書に基づく講義を中心に宣教学的な見方、分析力を身に付けることを目指します。リーディング・アサイメントの発表とディスカッションがあります。教科書は、ジョン・ストット、クリストファー・J・H・ライト共著「今日におけるキリスト者の宣教」、J・I・パッカー著「伝道と神の主権」、「ケープタウン決意表明」日本ローザンヌ委員会訳（いのちのことば社）

宣教学 II（異教・異端）

日本の在来宗教、新宗教を知ることを通して、日本人の精神性、宗教性を理解して、宣教のためのヒントを得ることを目指します。キリスト教の異端も概観し、私たちの間で生じる危険なサインにも目を向けます。

宣教学 III（コミュニケーションと放送伝道）

教会の働きとしての放送伝道の有用性と、メディアによるコミュニケーションの可能性について学びます。「話し方」の実践も含め、説教者としてどう語っていけば良いのか、言葉で伝えるとはどのようなことか、語る対象はどのような人たちなのか考えていきます。

牧会学 I（序論）

「牧会とは何か。」この基本的な問いを聖書に問い、牧会の本質を理解することを試みた上で、牧会者の資質や自己管理、牧会と牧会者の周辺の諸課題にも目を留め、牧会奉仕に備えます。

牧会学 II（牧会カウンセリング）

牧会を支える働きとしてのカウンセリングについて学び、聖書に即した自己理解と人間理解、コミュニケーションの深化を目指します。

牧会学 III（教会組織）

教会の存在と働きに関わる実際的な諸課題に注目し、牧会者の実務について知り、備えます。礼典や諸式、教会組織と運営実務、宗教法人事務なども含みます。

牧会学 IV（牧会の神学）

3年前期までの学びを総合して、各自の使命と賜物の理解に照らして「牧会の神学」を構築します。牧会に関わる聖書箇所を学び、関連の著作を精読し、ディスカッションで理解を深めて作業を進めます。

牧会学 V（牧会の諸問題）

前期では、牧会上の諸問題を取り上げて、ディスカッション形式で対処方法を探る。後期では、牧会者としてのあるべき姿、奉仕を考える。前期では伝記をブックレポートし、後期では祈りの本をブックレポートして、分かち合う。

教会教育学

教会教育の根拠を探り、定義し、目標を定めます。そして、聖霊の働きを留意しつつ、教会教育の枠組み、内容、方法論を考察します。

キリスト教倫理学 ※（奇数年度開講）

キリスト者は何を基準に生きるのか、神のみこころをどのようにして知るか、といった倫理の土台を学ぶとともに、労働の倫理、性と結婚の倫理、生命倫理、社会倫理などの研究発表をします。

礼拝学

「礼拝とは何か、どうあるべきか」を旧約聖書、中間時代（シナゴグ礼拝）、新約聖書、宗教改革期から歴史的に学ぶ。その後、「賛美」「聖書朗読」「説教」「聖餐式」などの礼拝の各項目を聖書から考える。

教会音楽 I

礼拝の中で音楽がどのように用いられてきたのかということ、聖書の時代から現代までの歴史を通して、各時代の信仰姿勢をも探りながら概観しつつ、聖歌隊や奏楽奉仕の目的やあり方について等、教会の礼拝における音楽にかかわる営みが、どうあるべきかを考えてみます。

賛美歌学

プロテスタント(福音)教会の賛美の理念、それはみことばの賛美です。教会に受け継がれてきた信仰者達の信仰告白である賛美の歌を、時代を追って観察します。その背景にある時代や個人の信仰姿勢を探りながら、現代の賛美歌を教え導かれないと願います。

教会音楽実習 A

神への賛美を実践的に学びます。呼吸、発声、歌唱の基礎から合唱を通して学びます。

教会音楽実習 B,

ことばを歌う意味を考えつつ、主への賛美を益々学びましょう。

教会音楽実習 C

賛美を歌う基礎（呼吸、発声、発音、読譜）をグループで、賛美の歌を個々に学びます。

器楽実習

オルガンの初歩から、賛美歌、そして前奏曲を弾くことができるように、レベルに合わせた個人レッスンを行ないます。

伝道実習

少人数のチームでキャラバン伝道に出かけます。キャラバンそのものは夏の短期間で実施されますが、ほぼ通年でなされる計画、立案、準備の全体が実習です。

【神学科目・論文・その他】

神学英語 A/B

聖書と神学の学びを助ける英語力を育てるため、英文読解を中心に学びます。語彙、構文理解、速読など、能力に応じた教材と方法を用います。

自主研究

聖書宣教会のカリキュラムではカバーし切れない、かつ自分で研究したいテーマを設定して、アドバイザー教師と相談の上、独立で研究を進めていきます。これは教師会の承認を必要とします。

論文講習

ここではおもに卒業論文、卒業研究を前提とした論文の書き方を学びます。テーマの設定の仕方、リサーチの方法、論文のための文章論等。その実際的練習のために、仮のテーマを設定し、そのテーマに沿ってリサーチを進めて行きます。

論文演習

各自が卒業論文、卒業研修のテーマを定めた後、各自が交互にリサーチの発表を行いつつ、研究を深めていきます。

卒業論文

4年課程卒業の場合必修です。3年課程でも教師会の認定があれば論文を書くことは可能です。各自がテーマを設定し、一年間のリサーチを経て論文にまとめます。試問を経て承認されます。

卒業研究

3年課程卒業の場合必修です。各自がテーマを設定し、前期は翻訳やブックレポート、後期は積義ペーパーをまとめます。

【教会音楽】

教会音楽Ⅱ ※（奇数年度開講）

古代からの教会音楽史を、教会の歴史（信仰史、精神史）と関連付けながら概観し、それぞれの時代や個人の信仰が音楽にどのように反映されているのかを、文献から、また楽曲分析から確認することにより、現代の私たちが目指すべき教会音楽のあり方を考えます。講義と音楽専攻研修生の演習により互いに学びます。

賛美歌学Ⅱ ※（偶数年度開講）

賛美歌の歴史を、背景の教会史、教理史との関連を意識しながら現代まで概観します。講義のみでなく、研修生が各々調べたことを分かち合うことによって互いに学びます。

礼拝学Ⅱ ※（奇数年度開講）

礼拝について、賛美について、聖書に学びます。キリスト教会の礼拝の歴史を学びます。

オルガン学 ※（偶数年度開講）

オルガンの発達の歴史、オルガンの構造を学び、レジストレーションを自ら決めることができるようにします。

教会音楽特講 ※（奇数年度開講）

2017年度は8月に集中講義で実施。

オルガンⅠ

オルガンの基本的奏法を学び、コラール前奏曲を中心としたオルガン曲の演奏、会衆賛美のリードの仕方を学びます。

オルガンⅡ

音とことばとの結びつきを理解し、バッハを中心としたオルガン曲の演奏、賛美歌のハーモニー付け、小形式の即興を学びます。

声楽Ⅰ

(1) 発声法、呼吸法、談話術教育の基礎を学びます。(2) シュッツ、バッハ他の声楽曲を通して、「みことば」を歌うことを学びます。

声楽Ⅱ

声楽Ⅰに続き、個々に指導します。賛美の歌を歌うこと、みことばを歌うこと、日本語で歌うことを課題に、必要な事を教えられたいと願っています。

作曲ⅠⅡ

礼拝や教会学校で使うための「賛美歌」「みことばの歌」を作ります。基本的な和声と対位法、転調、朗読、朗誦等を経て、そのみことばのもつ豊かな意味を表すにふさわしい曲を探り求めます。

合唱指導法ⅠⅡ

Ⅰ 賛美、聖歌隊指導の基礎を学びます。発声、発音、呼吸、歌唱の基本、読譜(ソルフェージュ)指導、総譜奏法の初級、楽曲解釈、演奏法、指揮法の基礎を学びます。16～18世紀の2, 3, 4声合唱曲を中心に学びます。

Ⅱ Ⅰに続き、多種の合唱曲、小編成のアンサンブルを伴ったカンタータの指導・指揮を学びます。

教会音楽演習Ⅰ

卒業研究と同じ教会音楽科目を通年で履修します。

教会音楽演習Ⅱ

卒業研究以外の教会音楽科目を履修します。

卒業研究(教会音楽専攻)

1. 1年次の後期中にテーマを選択します。
2. テーマに基づいて担当講師が決定されます。
3. 担当講師の指導を受け、研究をまとめます。
4. 研究発表については未定。
5. 教会音楽演習、卒業研究は卒業年次に受講することを原則とします。